

氏名	楊 奕
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第53号
学位授与の日付	平成18年1月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育科学専攻
学位論文題目	中国近代美育思想の研究 ——その成立と展開の軌跡——

論文調査委員 (主査) 教授 辻本雅史 教授 鈴木晶子 助教授 駒込 武

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国の19世紀末から20世紀末にかけての約100年間の美育運動を、中国の近代化と内在的に関連させて捉えることを課題としている。なかでも20世紀に「美」や「美育」を提唱した知識人の理論的言説と実践の諸相を明らかにしている。それを通して、中国近代美育思想の成立とその展開を歴史的に解明しようとしている。本論文は大きく2部構成で、各部3章に、序論と終章と併せて合計8章構成から成っている。

「序論」において、本論文の課題と研究史及び方法が提示される。

近代中国の3回の大きな転換（清末の専制体制から中華民国の近代的共和体制への転換、新中国成立以後のマルクス思想への転換、80年代の市場開放経済への転換）は、これまで主に思想、政治、経済の各方面から分析されてきたが、この転換期の運動にはいずれも「美」の強調と「美育」の実践が唱えられていたこと、それは「美」こそ中国を「中国的」に近代化するための不可欠な回路と見なされてきたからであると主張される。本論文は、中国の「中国的」近代化を美と美育の視点から捉える試みである。

第I部第1章では、西洋近代の侵略による民族的危機の、清末における近代化への改革、すなわち中体西用論にもとづく洋務運動および変法運動とその教育改革、及びその挫折に至る経緯が概観され、併せて中体を保持したままの表面的近代化の限界が指摘される。

第2章では、この中体西用思想を克服して、人間そのものの変革、いわば封建的・儒教的道徳的人間から近代的人間への思想的な変革を構想した知識人・王国維の言説が取り上げられ、詳細に検討される。王国維はドイツ哲学を修め、中国に美育理論を初めて導入した知識人であったが、中国の近代化は人間そのものの変革によってこそ可能であると認識した。この点が、強調される。そして普遍性をもつ美と美育こそ、このために選び取られた方法であると、中国近代化における美育の意義が指摘される。「美」は、中国でも「善」と結合し道徳教育の方法として古来唱えられてきたとの論理で、中国伝統思想と近代美学との共通性や普遍性が確認される。ここにおいて、中国的アイデンティティを失うことなく、独自の近代化を歩む可能性が美育に見出されたとされている。その意味で美育は、道徳教育と国民教育を繋ぐ方法と認識されていた。王によれば、近代とは中国の西洋文明化ではなく、東西の違いを超えた「普遍的価値」の実現であるという。しかし王は、美とは何かを哲学的に探求する中で矛盾に直面した。王は「美」を「真理」と等置し、この「萬世の真理」と美の無功利性の認識（天才による直感）を哲学者と芸術家の天職と捉えた。しかし美に付きまとう「功利性」との矛盾を王は解決できず、結局、美育の主題から離れていった。

第3章では、その後登場した蔡元培の美育理論が取り上げられる。彼は「美とは何か」の哲学的問いを回避し、「何が美か」という現実的課題から出発した。蔡は美を、その認識主体の問題として捉え、美を可能にらしめる六条件（普遍的、民主的、科学的、哲学的、現実的、民族的）の整備に努力した。そのために科学の検証に耐えうるために実験美学を導入するとともに、近代西洋哲学と科学を中国の伝統思想で解釈しなおし、民族的固有性を保持した中国の近代思想と国民教育の

道筋を展開した。

第Ⅱ部は、新中国以後のマルクス主義美育の理論と実践が描かれる。第1章では新中国での美育の展開が、文化大革命の混乱期も含めて、歴史的に概観される。第2章では80年代以後取り組まれた国家的美育の一である西南地区大美育系統論の形成が、主に劉兆吉の美育心理学に基づいて紹介されている。第3章は、劉を継承して大美育系統論を発展させた趙伶俐の理論と実践の実態が、文献研究だけでなく、現地調査に基づいて詳細に紹介、検討され、その可能性と問題点が指摘されている。すなわち80年代以後の中国は道徳観価値観の混乱の現実に対して、美育の可能性に再び注目するようになった事情が前提に指摘されている。そして一定の成果をあげているといわれている趙伶俐の大美育系統論が、蔡の美育理論との連続性をもつことが、たとえば普遍的、科学的、民主的、哲学的、現実的、民族的という六要素を取り入れていること、科学や心理学へ傾斜していること、などの点で強調されている。大美育系統論の特質を、美を認識する人間の心理分析に重要な理論的根拠を置き、その科学性への信頼が立脚点であるところに見出している。この背景には、科学的社会主義を唱えるマルクス主義理論があること、そしてそれは、科学が哲学を包括しようとしている科学主義があると指摘する。しかし数量化を目指す科学の基準によって美を規定することは、人間個人の個別的感性そのものを無力化してしまいかねないと、その問題点を指摘することで章を終えている。

終章では、王国維、蔡元培を通じて形成されてきた中国の美育思想とその理論を整理してその相互の関係性をまとめ、その視点から現代の大美育系統論のもつ可能性と限界を評価している。なかでも美の両義性に注目している。王国維は人に優劣をつける美の功利性や影の側面に気づき、その解決不能性を前に挫折したこと、蔡元培は美の両義性の両面を融合させ、包容性と柔軟性のある美育理論を展開したこと、蔡の一面を継承した大美育系統論は、科学による美の可能性に期待を抱き、美の内包する危うい側面から目を逸らしたこと、などを指摘する。そして美のもつ危険な側面は、美がもつ積極的意味や可能性を閉ざすものではなく、いわば美への過度な期待への一定の抑制と見るべき立場、いわば王の苦悩を身に体しつつ、美の可能性を求める努力の必要性を自覚することで論文は閉じられている。

論文審査の結果の要旨

本論文の大きな特色は、以下の通りである。

(1) 日本の教育学研究において美を正面から主題にすえた先行研究はほとんどない。その点、本論文は、中国近代における美と美育を正面から論じた意欲的論文であり、今の教育学研究のあり方に対する刺戟的な問題提起であると評価できる。

(2) 中国の美と美育の思想と歴史を、中国近代化の視点から捉えている。すなわち、西洋近代が招来した19世紀以後の中国の民族的・国家的危機を、中体西用論の下での欧化政策で切り抜けようとした清末の洋務運動と変法運動の歴史的限界を確認した上で、王国維、蔡元培らが見出した内面からの近代化（道徳的な国民化）が真の近代化をもたらすと認識、および美と美育は、そのための方法として彼らによって見出されたという論点が指摘されている。しかも美と美育が中国の近代変革期に常に注目された主題であることを著者は発見し、本論文の主題設定となった。その意味で本論文は、美と美育をめぐる中国近代思想形成史、または美を主題にした中国近代教育思想史と見ることができる。

(3) 本論文は美育をめぐる中国近代思想形成史にとどまるものではない。現在の中国で実践されている大美育系統論の理論と実践の実態が、その著作に留まらず、現地調査を踏まえて詳細に分析され、その意義や限界が検討されている。現代中国の美育理論と実践を初めて日本に紹介した功績も含め、この点は本論文の大きな特色である。さらに現代中国の美育理論と実践が、王国維、蔡元培ら清末・民国期知識人や新中国のマルクス主義的美育の思想の歴史系譜に即して検討されて、その意義や限界に言及していることが重要である。この点、現代的実践課題に学問的にコミットしようとする意欲に満ちている。

(4) 中国における西洋哲学の受容が、本論文のもうひとつの主題となっている。カント以下のドイツ哲学を受容した王国維や蔡元培において、西洋哲学がいかに中国の伝統的な美の思想にもとづいて再構成されていったかが解明されている。近代西洋哲学の「普遍性」が、朱子学等の人間観の伝統（例えば「聖人、学んで至るべし」）や中国の礼楽観を下敷きに解釈された事例（例えば美と善の一致思想）が数多く指摘される。それによって王は美に東・西を越えた「普遍性」を見出し、蔡は西洋近代の「普遍」基準にもとづいて中国的文化の「普遍性」を高く評価したといった新知見が示される。中国的独自

性や民族的アイデンティティを保持しつつ、西洋哲学的な「普遍としての近代」思想の論理が王や蔡の近代思想とする図式が描かれ、それを中国近代思想形成史として説得的に展開している。

(5) 中国美育の思想系譜を、王国維、蔡元培、マルクス主義、大美育系統論の系譜においてとらえ、それらを哲学、科学、美と善（美による道德教育可能性）といった視点から比較し、そこに通底する特質と独自性・限界性を解明している。この点が、本論文の視点の大きさと信頼性を高めている。なかでも本論文の思想史的視点からの、大美育系統論の問題点指摘は高く評価できる。すなわち「美育カリキュラムの科学化」の名の下、美育の評価を科学基準によって定量化する方法論に依拠していることが、豊かな人間の感受性を、政治的に規定された道德的価値や類型の中にはめ込んでいく危険性をはらむと指摘している。王の思想的苦悩を検討してきた本論文によってはじめて明確になった論点であるといえよう。

総じて本論文は、危機的な近・現代中国における美育による国民教育の可能性を探っているが、たんにその積極面だけでなく、その危うさをも併せて直視する思想史研究になっており、この点で、現代的実践に豊かな示唆を提示することに成功している。

以上の諸点に本論文の意義を認めることができるが、また次のような問題点も浮かび上がってきた。第一に、本論文は清末・民国初期の知識人の美育思想と、新中国におけるそれとの双方を研究対象とすることにより、対象の広がりを獲得しているが、それが逆に本論文の対象・方法における統一性を損なったと思われるということ。第二に、王国維における美の両義性（美の自律と道德教育の手段化）がはらむ矛盾の認識の指摘が出色の論点であるが、これが十分には深められていないこと。この矛盾の解決の見通しがいかに存在しうるかの考察は、著者が蔡や戦後の美育にも美の手段視が根強いことを批判的に言及しているだけに、王の議論の射程を検討することで、本論文は一層の深みと重要性を獲得したはずであった。

こうした問題点が残るとはいえ、いずれも本論文が達成した学術的価値を損なうものではないとの評価が、審査委員の一致した意見であった。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成18年1月5日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。